二〇一八年度

福岡県公立高校入試問題

五〇分
六〇点

一　次は、美香さんが二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会の【大会ビジョン】を見て、祖父と話をしている場面である。これらを読んで、後の各問に答えよ。

【大会ビジョン】

スポーツには
世界と未来を変える力がある。

1964年の東京大会は日本を大きく変えた。2020年の東京大会は、
「すべての人が自己ベストを目指し(全員が自己ベスト)」、
「一人ひとりが互いを認め合い(多様性と調和)」、
「そして、未来につなげよう(未来への［ア］)」
を3つの基本コンセプトとし、史上最もイノベーティブで、
世界にポジティブな改革をもたらす大会とする。

(公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会ホームページによる。一部改変)

美香さん

2020 年が楽しみだね。3 つの基本コンセプトがあるんだね。私は同じホームページの続きに「共生社会」という言葉を見つけたよ。

祖父

みんなが共生できる社会はすばらしいね。1964 年のオリンピックを見て，世界中がスポーツの感動を共有して，みんなが一つになったように感じたよ。その頃，東京では首都高速道路や東海道新幹線が開通するなどして，めざましく都市機能が発展し，世界に向けて戦後の［イ］をアピールできたんだよ。

そうなんだね。2020 年には，災害から［イ］している力強さを，世界に見せることができたらいいな。

問一　ア に入る語句として、「未来につなげよう」に着目して考えた場合、最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

1　推進　2　統率　3　融合　4　継承

問二　イ には「ふたたび盛んになること」という意味の語句が入る。その語句を漢字二字で、楷書で書け。

問三　共生と同じ構成の熟語を、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

1　投球　2　必着　3　善悪　4　清潔

問四　祖父が話した波線部の内容に近い状況を表す四字熟語として最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

1　日進月歩　2　大器晩成　3　一進一退　4　温故知新

問五　「多様性と調和」の「調」を楷書で書いた場合の総画数と、次の1～4の行書の漢字を楷書で書いた場合の総画数が同じものを一つ選び、その番号を書け。

1　録　2　演　3　照　4　権

二

次の文章を読んで、後の各問に答えよ。句読点等は字数として数えること。

A

日本は温暖な気候であることと、島国であることから水が豊富で良質の樹木に恵まれたことにより、古来から加工が容易でかつ柔軟な強度をもつ木造による、柱と梁（はり）の構造の建物が造られてきた。

それに対して、欧米諸国は良質の樹木を大量に得るのが難しく、土を固めて焼いたレンガや、石造による組積造（そせきぞう）がおのずと発達したとみられる。

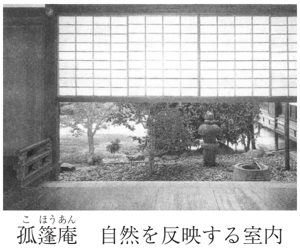
このような建築資材の相違は、その居住空間にも強く影響し、たとえば柱と梁による日本の住宅は開口部を容易にとることができた。それが幸いし、外部と内部が必然的に関係をもった。そこでそれぞれを媒介する仕掛け、すなわち京都の町家などにみられる格子戸のような壁とも窓枠ともつかない曖昧な間仕切りや、縁側のような外とも内ともつかない中間領域などが生み出された。これによって日本人の住居は、外部の自然に開かれるようになったのである。

一方、欧米諸国は組積造を中心とした壁＝構造体であったため、大開口をとることが難しく、おのずと内部と外部の関係が希薄となった。そのことが、欧米で「インテリア」という概念が早くから生み出される要因となったとみられる。

外部に開かれた日本の住居は、こうして自然美を十分に享受できるようになった。そして、開口部から四季のいろどりをいつでも眺めることができたために、自然と室内は簡素なものとなった。開口部からは新緑や花の香りが風とともに流れ込み、木々のそよぐ音、鳥の鳴き声に癒された。

日本人が自然の中に美を見いだし得た要因の一つには、この開放的な日本の住居のしくみがあったといってよいだろう。

日本の住居の特徴の一つである障子は、白い和紙を格子戸に貼っただけのものであり、かつては紙の障子一枚で自然に接していた。この障子は、ほのかな自然のいろどりを室内に反映させた。これは、開口部をとざしつつも、自然と一体となるための工夫である。



孤篷庵（こほうあん）　自然を反映する室内

木目を生かした白木の柱や、皮つきの自然木そのものの床柱、土壁など、日本家屋のつくりは、いかに自然と一体となるかをめざしたも

のといってよい。欧米では床と離された椅子に座り、ベッドに寝るが、日本では畳に座し、畳に寝る。こうした態度も、いかに地面に近づくかという自然と一体となろうとする工夫といっても過言ではない。

もともと外部に開かれ、自然美を享受するのに適した日本の住居に、日本人はさらなる自然美と一体となる工夫を施してきたことがわかる。ここに「優美」というものが、日本人の生活と一体となったものであることを思い知るのである。

一方、住居の庭についても、日本では古来、自然風景式庭園と呼ばれるもっぱら自然を写す作庭が主流であった。『万葉集』などを見ても「しま」あるいは「山斎」と呼ばれた庭がしばしば詠まれている。

平安時代に著された庭作りのテキスト『作庭記（さくていき）』にも「生得（しょうとく）の山水をおもはへて、その所にはさこそありしかと、思ひよせ〳〵たつべきなり」と記され、さらに「人のたてたる石は、生得の山水には、まさるべからず」とあるように、自然の姿をできるかぎり写すことが説かれている。

日本における庭園の起こりは磐座（いわくら）であるといわれ、これは神の宿る依代（よりしろ）であった。それが枯山水と呼ばれる石組の庭へと発展したのである。

また、『作庭記』には庭の池には必ず中島を浮かべることを説いているが、この中島は「神仙島（しんせんとう）」と呼ばれ、神の住処（すみか）に見立てられている。このようにみてくると、庭の発祥は神としてあがめられた自然美、すなわち優美そのものであることが明らかとなる。

そして日本の住居は、その優美を生活と一体にするための一種の装置といってもよいだろう。

（宮元健次「日本の美意識」より。一部改変）

（注）　インテリア…室内装飾。室内調度品。
しま・山斎（しま）…泉水のある庭園。
生得…うまれつき持っていること。
磐座…神のおわします所。御座所。
依代…神霊が宿るための目標物。
発祥…物事の起こり出ること。

問一　次の表は、[A]の部分に書かれている内容について、「日本の住居」と「欧米諸国の住居」を対比させて整理したものの一部である。[ア]・[ウ]に入る最も適当な語句を、[ア]は[A]の部分から二字で、[ウ]は[A]の部分からそのまま抜き出して書け。また、[イ]に入る内容を、表の「欧米諸国の住居」の書き方に合わせて、二十五字以上、三十字以内でまとめて書け。

	日本の住居	欧米諸国の住居
建築資材	[ア]	レンガ・石
開口部	[　　イ　　]。	大開口をとることが難しく、おのずと内部と外部の関係が希薄となる。
室内	[ウ]となる。	「インテリア」という概念が発達する。

ア

イ

ウ

問二　本文中にその優美を生活と一体にするとあるが、どういうことか。二十五字以上、三十五字以内で説明せよ。

問三　この文章の展開について説明した文として最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

1　住居と日本人のものの見方との関係について結論を示した上で、日本の気候の特徴を根拠として挙げている。
2　障子や畳など複数の例を挙げてそれらの特徴を比較しながら、日本家屋で生活する人々の心理を分析している。
3　日本の庭作りに関して書かれた古典の作品の一節を引用した上で、日本人と自然との関係について問題提起している。
4　居住空間から庭へと話題を転換しながら、日本の住居と日本人の美意識との関連について考えを述べている。

三

次の文章を読んで、後の各問に答えよ。句読点等は字数として数えること。

【ここまでのあらすじ】　日本の文化や芸術を学んでいる英国人の「リーチ」は、「柳宗悦（やなぎむねよし）」と出会い、芸術について語り合ううちに柳を尊敬するようになった。やがて、リーチは陶芸を学び始める。ある日、リーチは弟子の「亀乃介（かめのすけ）」とともに、柳が立ち会う中で、窯入れ（土をこねて形にし、乾燥させた器などを焼くこと）をした。まだ作品を取り出してはいけないのに、柳に早く作品を見せたくてリーチは窯を開ける。

ガラガラとレンガが崩れる音がして、窯の取り出し口が開いた。

リーチは、木槌（きづち）を地面に落とすと、立ち上がって、両手に分厚い手袋をはめた。そして、ようやく振り向くと、言った。

「さあ、でき上がった。ついに完成したんだ。取り出そう、カメちゃん」

「いけません、先生。まだ熱過ぎます。あわてて手を出したら、やけどしてしまう。それに、そんなに早く取り出したら、ひびが……」

［A］したような顔になって、リーチが言った。

「手を貸してくれないなら、私がひとりでやる」

逸（はや）る心を、リーチはついに抑えきれなかった。

じゅうぶんに冷めるのを待たずに、無理やり取り出した陶器のほとんどは、見るも無惨な状態になっていた。

焼成する際、無我夢中で窯に火を入れたせいで、大量の灰が作品の上に降り落ち、表面がざらついた仕上がりになってしまっていた。

そのほか、ひびが入ったもの、割れてしまったもの、想像していたのとはまったく違う色になってしまったもの――。

窯の中から陶器を取り出す①リーチの顔を、暗い雲が次第に覆っていった。その表情は石のように硬くなった。

亀乃介は、ひとつひとつ、作品を地面の上にきちんと並べていったが、手袋をした手が震えてしまうのを止められなかった。

――これはひどい。

こうなってしまったのは……自分のせいだ。

あんなふうに火を入れたら危険なことは、わかっていたはずだ。それなのに、火事になる危険を冒してまで、燃やしてしまった。

窯を開ける頃合いも、いまではなかった。落ち着いて、もっと時間をかけて開けるべきだったのに――。

わかっていたのに、焦(あせ)る先生を止めることができなかった。

自分のせいだ――。

絶望にも似た気持ちが、亀乃介の中に広がった。自分ですら、こんな気分になっているのだ。先生は、どんなに落胆していることだろう。

亀乃介は、がっくりと肩を落とした。激しい後悔が、嵐のように胸中に渦巻いた。

勇気をもって、リーチに進言できなかったことが悔やまれた。リーチが北京から帰ってきて、朋友(ほうゆう)である柳宗悦のもとで初めて創る記念すべき作品だったのに――。

「カメちゃん」

リーチに呼びかけられて、亀乃介は、うつむけていた顔を上げた。

額に汗をしたたらせながら、リーチがすぐそばに佇(たたず)んでいた。両手に、小さめの壺(つぼ)を抱えている。

「……これを、見てくれ」

リーチが差し出した壺を、亀乃介は、両手を伸ばして受け取った。

それは、青磁の壺だった。

見たこともないような深みと豊かさのある、美しい翡翠(ひすい)色。

表面にはざらつきがまったくなく、つややかな肌は、朝日を反射して白い光を放っている。

――これは……。

亀乃介は、震える瞳を上げて、リーチを見た。リーチの顔に、光が差しているのがわかった。

柳が歩み寄って、「どれ」と、亀乃介に向かって手袋をした両手を差し出した。そして、壺を受け取ると、朝日が降り注ぐ中にかざして見た。

柳が目の前に掲げた壺を、リーチと亀乃介は、じっと見つめた。

まるで、翡翠色の水鳥のようだった。

柳の手から、澄んだ夏空へと飛び立ってしまいそうな、みずみずしさと活力とが、その壺には宿っていた。

柳は、リーチのほうを振り向くと、口元に微笑を浮かべて、ひと言、言った。

「――好(い)いね」

②リーチの顔が、たちまちほころんだ。

（原田マハ「リーチ先生」より。一部改変）

（注）柳宗悦…民芸研究家。「柳」も同じ。

青磁…鉄分を含有し、青緑色または淡黄色を呈するうわぐすりを掛けた陶磁器。

翡翠…鳥のカワセミの別名、または光沢のある緑色の玉。

問一　本文中の［A］に入る最も適当な語句を、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

1　ほっと　2　むっと　3　はっと　4　ぞっと

問二　本文中の自分のせいだと繰り返す亀乃介の心情を説明したものとして最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

1　立場をわきまえずに出過ぎた行動をとって、先生であるリーチを怒らせてしまった自分を責めている。
2　火事になる危険を冒してまで窯に火を入れてしまい、陶芸に対する考えが甘かった自分を責めている。
3　無我夢中で火を入れたり、早く窯を開けたりしようとするリーチを止められなかった自分を責めている。
4　窯に火を入れるリーチを見て、わざと手伝おうとせず、危険な目に遭わせてしまった自分を責めている。

問三　本文中のまるで、翡翠色の水鳥のようだったについて、「何の」「どのような」様子なのかを説明したものとして最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

1　朝日を反射して白い光を放っている水鳥の、夏の空へと飛び立つ様子。
2　地面に並べられた翡翠色の青磁の壺の、つややかに光り輝いている様子。
3　降り注ぐ朝日を浴びた翡翠色の青磁の壺の、生命力と躍動感がある様子。
4　見たこともない美しい青磁の壺の、みずみずしい水鳥の絵に見える様子。

問四　次の［　］の中は、本文中のリーチの描写について、太田さんと吉岡さんが会話をしている場面である。［ア］に入る最も適当な語句を、本文中から十四字でそのまま抜き出し、その初めの七字を書け。また、［イ］に入る内容を、二十字以上、三十字以内で考えて書け。ただし、イは、**よい作品**という語句を必ず使うこと。

太田さん　リーチ先生の顔の描写から気持ちを読み取ることができるよ。
吉岡さん　そうだね。「①リーチの顔を、暗い雲が次第に覆っていった」という描写からは、リーチ先生の、よい作品が一つも見つからないかもしれないという不安感や焦りを読み取ることができるね。
太田さん　私もそう思ったよ。その気持ちがだんだん高まっているよね。その後、よい作品が見つかったかもしれないという期待感や希望を読み取ることができるね。
吉岡さん　本文のどの描写からそう言えるの。
太田さん　「［ア］」という描写からそう言えるよ。
吉岡さん　なるほど。最後の「②リーチの顔が、たちまちほころんだ」という描写からは、リーチ先生の、［イ］を読み取ることができるね。

ア　□□□□□□□

イ　□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

四　次の文章を読んで、後の各問に答えよ。句読点等は字数として数えること。

第一八六段

吉田と申す馬乗りの申し侍りしは、「馬ごとにこはきものなり。人の力、あらそふべからずと知るべし。乗るべき馬をば、まづよく見て、強き所、弱き所を知るべし。次に、轡（くつわ）・鞍（くら）の具に、危き事やあると見て、心にかかる事あらば、その馬を馳（は）すべからず。①この用意を忘れざるを馬乗りとは申すなり。これ秘蔵の事なり」と申しき。

第一八七段

よろづの道の人、たとひ不堪（ふかん）なりといへども、堪能（かんのう）の非家（ひか）の人にならぶ時、必ず勝る事は、たゆみなく慎みて軽々しくせぬと、②ひとへに自由なるとの等しからぬなり。

芸能・所作のみにあらず、大方のふるまひ・心づかひも、愚かにして慎めるは得の本なり。巧みにしてほしきままなるは、失の本なり。

（「徒然草」より。一部改変）

（注）　こはき…手ごわい。
轡…馬の口にかませる器具。これに手綱をつける。
馳す…走らせる。
所作…芸能の身体行動には、日常行動と違った型があり、きまりがある。それらの、一定の形式による動作。
心づかひ…心くばり。心の持ち方。
得…成功。
ほしきままなる…自分の思うとおりにふるまうさま。

問一　本文中のあらそふの読み方を、全て現代仮名遣いに直し、平仮名で書け。

問二　次の［　］の中は、本文を読んだ南さんと佐藤さんが会話をしている場面である。

南さん　「第一八六段」に、①この用意を忘れざるを馬乗りとは申すなりとあるけれど、辞典で調べてみると、「用意」は、「心構え」という意味なんだね。「馬乗り」も、ただ馬に乗る人ということではないみたいだね。

佐藤さん　私もそう思うよ。「乗馬の［ア］」ということだよね。

南さん　なるほど。「第一八七段」の「道の人」のことなんだ。

佐藤さん　「第一八七段」の最初の部分の意味がわかってきたよ。様々な「道の人」はたとえ不器用であっても、「巧み」な素人(しろうと)に必ず勝る、ということだよ。

南さん　そうだね。その文の後の方に書かれている②ひとへに自由なるは、［イ］ということだね。

佐藤さん　こんな本があるよ。ここを読んでみて。

> 碁や将棋などの勝負事で、素人の腕自慢が、プロ新人に挑戦することがあるが、おおかたプロが勝つ。それは腕が違うのではなく、心構えが圧倒的に違うからだ。（中略）
> プロの慎重さは、くまなく張りめぐらされたコンピュータの回路のようなものなのだ。
> 途中までは調子良くて、もう一歩のところまでプロを追いこんでおきながら、一瞬の油断がミスを生み、そこをプロは当然のようについてくるのである。

（嵐山光三郎「転ばぬ先の　転んだ後の『徒然草』の知恵」より。一部改変）

南さん　そうか。ここに述べられているような「プロ」ならば、具体的にどう行動するべきか、ということについて書いてあるのが、「第一八六段」の「 ウ 」の部分だね。

(1) ア に入る語句を、漢字二字で考えて書け。

(2) イ に入る語句として最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

1　人に対してわがままである
2　ひたすら勝手気ままである
3　本当に堂々としている
4　むやみに手を抜きがちである

(3) ウ に入る内容を、『徒然草』「第一八六段」の本文中からそのまま抜き出し、その初めと終わりの五字ずつを書け。

□□□□□～□□□□□

問三　『徒然草』の「第一八六段」・「第一八七段」に共通しているのはどのような考えか。解答欄の下の語句に続くように、十五字以上、二十五字以内の現代語で考えて書け。

という考え。

五

Ｆ中学校では、全校生徒で取り組んでいる生徒会活動のよさを伝える言葉として、今年度のＦ中学校生徒会キャッチフレーズを募集し、決めることになった。次は、募集にあたり配付された【資料】である。これを読んで、後の問に答えよ。

【資料】（表）

Ｆ中学校生徒会キャッチフレーズを考えよう！

私が考えるＦ中学校生徒会キャッチフレーズ
※Ａにはあなたが考えたキャッチフレーズを書きましょう。

A

■ 1と2を読んで，Ｆ中学校生徒会キャッチフレーズを考えましょう。

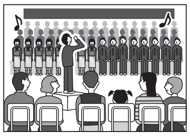
1　特色ある生徒会活動

○　朝のあいさつ運動

地域の方が始めた声かけ運動に，生徒会が合流した。毎朝，地域の方と一緒にあいさつをしている。

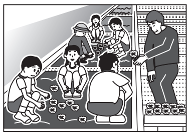
○　全校合唱

昭和50年に生徒会役員が中心となり始まった。地域の方を招いての合唱コンクールに向けて，10，11月に，帰りの会後，練習している。



○　花いっぱい運動

生徒の呼びかけで始まった。季節ごとに地域の方と，学校の周りに花を植えている。



【資料】（裏）

2　Ｆ中学校のよさについてインタビューした内容

質問　「Ｆ中学校のよいところはどこだと思いますか。」

地域の方

笑顔で元気にあいさつをする生徒が多いところですね。毎朝，あいさつをするときに，皆さんはいつも私たちにあたたかく接してくれるので，参加するのが楽しみです。

卒業生

全校で歌う伝統がずっと続いていることです。よりいっそう一体感を感じられるような合唱を目指して，学校が一つになることを期待しています。

校長先生

地域の方と花を植えるときなど，協力し合って取り組むことができるところです。みんなで声をかけ合って作業する姿がとてもすがすがしいです。

問　キャッチフレーズを決めるにあたり、各学級で生徒一人一人が自分の考えたキャッチフレーズについて発表する。あなたならどのようなことを発表するか。後の条件1から条件4に従い、解答欄の最初と最後に示している文につながるように、発表原稿を書け。

条件1　文章は、二段落構成とすること。ただし、解答欄の最初と最後に示している文は、段落には含まない。

条件2　【資料】を参考にして考えたキャッチフレーズを解答欄のAに書いた上で、第一段落には、そのキャッチフレーズにした理由を、【資料】の中の1と2のそれぞれから必要とする情報を取り上げ、それらを結び付けて書くこと。

条件3　第二段落には、あなたの考えたキャッチフレーズの表現のよさについて書くこと。

条件4　題名と氏名は書かず、原稿用紙の正しい使い方に従い、十行以上、十二行以内で書くこと。

私が考えるF中学校生徒会キャッチフレーズは、「A」です。

A

これで発表を終わります。

10

二〇一八年度

福岡県公立高校入試問題

一

解答

問一、4　問二、復興（同意可）　問三、2　問四、1　問五、4

解説

問一、「つなげよう」という言葉の言い換えを考える。

問三、上の漢字が下の漢字を修飾している。1は上の漢字が動作を表し、下の漢字がその対象を表している。3は反意の漢字の組み合わせ。4は同意の漢字の組み合わせ。

問四、「めざましく」「発展」とあるので、たえず進歩するという意味のものを選ぶ。2は、大人物が世に出るまでには時間がかかること。3は、よくなったり悪くなったりすること。4は、過去のことから新しい知識を得ること。

問五、15画。1は16画、2は14画、3は13画。

二

解答

問一、ア、樹木　イ、開口部をとることが容易で、外部と内部が必然的に関係をもつ（28字）（同意可）　ウ、簡素なもの

問二、神としてあがめられた自然美と日本人の暮らしを一つにするということ。（33字）（同意可）　問三、4

解説

問一、ア、日本は「良質の樹木に恵まれた」ので、古来から「木造による…建物が造られてきた」とある。イ、「建築資材」が樹木であったことが「居住空間」に強く影響したとして、「日本の住宅は開口部を容易にとることができた」ので「外部と内部が必然的に関係をもった」と述べている。ウ、「開口部から四季のいろどりをいつでも眺めることができた」日本の住居では、「自然と室内は…となった」とある。

問二、外部に開かれ、自然美を享受するのに適した「日本の住居」は、「いかに自然と一体となるか」をめざしたものであることをふまえて、「その優美」が、「庭の発祥は…自然美、すなわち優美そのもの」を指していることをおさえる。

問三、「日本の住居の特徴」として、前半では主に「居住空間」について、後半では「庭」について述べ、いずれにおいても「優美を生活と一体にするための」工夫がなされていたと説明している。

三

解答

問一、2　問二、3　問三、3

問四、ア、リーチの顔に、　イ、柳に認められるほどのよい作品ができたという満足感や達成感（28字）（同意可）

解説

問一、「いけません、先生」と亀乃介に止められたリーチが、「手を貸してくれないなら、私がひとりでやる」と不満を口にしていることから考える。

問二、リーチの作品が「無惨な状態」になっていたのを見た亀乃介は、火の入れ方や窯を開ける頃合いからこうなると「わかっていたのに、焦る先生を止めることができなかった」と後悔している。

問三、リーチの「青磁の壺」を「朝日が降り注ぐ中にかざして見た」ところ、「みずみずしさと活力とが、その壺には宿っていた」と感じ、「澄んだ夏空へと飛び立ってしまいそうな」水鳥の姿と重ねている。

問四、ア、リーチの「よい作品が見つかったかもしれないという期待感や希望」が読み取れる「顔の描写」を本文から探す。「無惨な状態」の作品の中に、一つの「青磁の壺」を見つけ、それを亀乃介に「差し出した」ときの「リーチの顔」に着目する。イ、「顔がほころぶ」は笑顔になること。朋友であり尊敬する柳が作品を見て「好いね」と言い、そのひと言によってリーチが顔をほころばせていることから、このときのリーチの「気持ち」を考える。

四

解答

問一、あらそう　問二、(1) 達人（同意可）　(2) 2　(3) 乗るべき馬～べからず。

問三、何事にも徹底した慎重さをもつことが大切である（という考え。）（22字）（同意可）

解説

問一、語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。

問二、(1) 馬に乗るときのことをよく知り、心構えを語れるほどの技量を持っていることや、「なるほど…『道の人』のことなんだ」と言っていることから考える。(2)「ひとへに」は、そのことばかりをする様子を表す語。「自由なる」は、後の部分で「ほしきままなる」と言い換えられている。(3) 第一八六段では「馬乗り」の「プロ」が秘訣を述べているので、「馬乗り」が具体的に心がけるべきこと、なすべきことについての記述を探す。

問三、第一八六段では「この用意を忘れざるを馬乗りとは申すなり」とあり、第一八七段では「大方のふるまひ・心づかひも、愚かにして慎めるは得の本なり」とあるので、どちらも「慎重さ」を持つべきだと説いている。

口語訳

（第一八六段）

吉田という馬乗りが申しましたことには、「馬はどれも手ごわいものである。人の力では、馬と張り合うことができないと知るべきだ。これから乗ろうとする馬を、まずはよく見て、その馬の長所、短所を知るべきだ。次に、轡や鞍といった馬具に、不都合なところがないかどうかを調べて、気になるところがあったら、その馬を走らせてはならない。こうした心構えを忘れない者が馬乗りというものである。これが乗馬における秘訣である」と申した。

（第一八七段）

あらゆる道の人は、たとえ未熟であっても、技能に長けた素人と比べてみれば、必ずそれよりすぐれていることは、油断なく用心して軽率なことをしないことと、ひたすら勝手気ままであることとは違うからである。

芸能や所作に限らず、たいていの行いや心くばりも、不器用で慎重であると成功につながる。器用に自分の思うとおりにふるまう

と、失敗につながる。

五

解答

（例）（私が考えるF中学校生徒会のキャッチフレーズ）花で結ぼう地域と学校

生徒が地域に呼びかけて始まった花いっぱい運動について、ぜひ多くの人に知ってもらい、積極的に参加してもらいたいので、このキャッチフレーズにしました。協力し合って取り組むので、生徒にとっては地域にたくさんの知り合いを作るよい機会になります。また、学校近隣の人には美しい花を楽しんでもらって、学校が親しみやすい場所になればいいと思います。

地域の方と生徒が植えた花が両者を結びつけるようにと願う気持ちが伝わりやすいように、シンプルな表現を心がけました。（12行）